

夫婦合同年祭

これの靈代にお鎮まり下さいます故△△△△刀自の靈並びに故○○○○大人の靈の御前に天理教 分教会長 慎んで申し上げます

久方の空行く月のさやかな光にも 立ち迷う浮雲の障りがあるが如く 何時までも健やかに明るくお通りいただきたいと心より願っておりましたのに ○○大人は昭和三十九年○月○日○○症が元で六十才で出直され 又△△刀自は昭和五十九年○月○日八十才を生きの限りとして 逝く水の還らぬ如く来世への旅路を發たれてしまいました 夜空にかゝる月影を見ては ふとありし日の面影を偲び 厚い親心のとりどりを思い起こしておりますが 早や春秋は幾度も夢の間と過ぎ去り 茲に二十年祭並びに四十年祭をつとめさせて頂く日と相成りました

御前に汝刀自 汝大人の遺族遠近より これの席に寄り集い 改めて生前の道すがらを とやありけむ かくやありけむと懐かしく語り合っております

思い返せば○○大人は明治三十五年○月○日 神奈川県愛甲郡石田村に生を享けられました が 幼くして父母に死別 その後は叔母に育てられ 兄弟もなく天涯孤独の人であると聞いております 一方△△刀自は若狭湾本郷なる○○村の農家の娘として 明治三十六年○月○日誕生されましたが やはり不幸にして父親に早く亡くなられ 為に厳しい風雪の中をよくぞしのいでこられました 幸い○○大人と結婚され 新舞鶴に新居を構えられました が 親子の縁の薄い流れを悟るべきか 三度に及ぶ流産の憂目を体験されたのであります この頃海軍工廠に勤務中の○○大人が一瀬文具店で万年筆一本を買求められたのがお道の信仰への手引きとなり その後は一男三女の子宝に恵まれ順風満帆の幸せに浴されました 別科六ヶ月のおぢば生活を心に浮べつゝ 終戦後は海洋氣象台につとめ勞かれ △△刀自は畑仕事や田植えの手伝い 或いはパンや菓子を行商など朝は朝星 夜は夜星を戴きつゝ 地味で静かで辛抱強い天来の資質を生かしてこまめに働き抜かれ 夫に対する内助の功を捧げられました 夫亡き後の昭和四十九年○月○日 夜半 隣家の○○商よりの火災を受けて 我が家が類焼する という大節を越え ○○分教会に一時は仮住まいという形を経て自衛官官舎へ 次いで新しい住宅へと進展されましたが これ偏に長年に亘り伏せ込まれた数々の芽生えであり △△刀自の御徳の至すところと信じて疑いません 何分にも思い出は尽きず 口や筆に尽くせませんが あの日この時の喜びや悲しみが 今走馬燈の如く脳裡に浮かんで参ります

汝刀自汝大人亡き現在 遺れる子達孫達一同互いに救け合いつゝ それぞれの幸せを噛みしめつゝ 茲に昭和四十年○月○日に開設された○○布教所の靈代の御前に 種々の物を御供申し 長年に亘ってお連れ通り頂いた感謝と御礼の玉串を一人ひとり奉獻して頂きますが どうかこれより後も天翔り国翔り先になり後になり思召し下さる陽氣ぐらしの実が遺族たち一同の先々に見えて参りますようにお導きの程を一同と共に慎んで申し上げます